

## 『讚岐典侍日記』の和歌をめぐる

丹下 暖子

### 一、はじめに

平安後期に成立した『讚岐典侍日記』は、堀河天皇と鳥羽天皇に仕えた讚岐典侍（藤原長子）による日記で、上下二巻から成る。堀河天皇の発病から崩御までの日々を記録する上巻と、鳥羽天皇に出仕する日々を記しながらも、堀河天皇を回想、追慕することに重点を置く下巻では、記事の性格が異なることもあり、さまざまな相違点が見られる。その一つが、和歌の有無である。『讚岐典侍日記』には合計二十三首の和歌が載るが、そのすべてが下巻に配置されている。上巻には引歌表現もほとんど見られず、わずかに指摘できるものも日記執筆の動機を語る冒頭の序の部分に集中している。堀河天皇の病状や臨終のさまを克明に描写しようとしたとき、和歌や引歌表現は入り込む余地がなかったのだろう。

下巻にのみ見られる和歌には、どのような特徴があるのだろうか。一例を挙げる。

五月四日、夕つかたになりぬれば、菖蒲ふきいとなみあひたるを見れば、去年の今日、何ごと思ひけん、菖蒲の輿、朝餉の壺にかき立てて、殿ごとに、

人々のぼりてひまなくふきしこそ、美豆野のあやめも今はつきぬらんと見えしか。またの日も、空はさみだれたるに、軒のあやめ、しづくもひまなく見ゆるに、

五月雨の軒のあやめもつくづくと袂に音のみかかる空かな

とのみおぼゆ。

(嘉承三年五月 四四九頁)<sup>(2)</sup>

鳥羽天皇に再出仕した嘉承三年(一一〇八)五月、菖蒲ふきの様子を目にした讚岐典侍は、一年前のことを思い出す。一年前の五月は、堀河天皇もまだ病に倒れていなかった。「五月雨の」歌は、堀河天皇の在りし日に思いを馳せた讚岐典侍が物思いにふける様子を詠んだものである。

この「五月雨の」歌のように、下巻の和歌はすべて『讚岐典侍日記』の主題とされる堀河天皇の追慕と関連している。和歌は、「追慕の記」<sup>(3)</sup>と称される下巻を考察するにあたって看過できないものと言えるだろう。そこで本稿では、下巻の特色の一つである和歌について検討し、その役割や位置づけを論じてゆく。また、讚岐典侍の詠歌の特徴についても言及する。

### 二、古歌の引用

下巻は、堀河天皇の崩御から約三カ月が経った嘉承二年(一一〇七)十

月、讃岐典侍が鳥羽天皇への再出仕を求められるところから始まる。堀河天皇の在世中にも持ち上がった話ではあったが、讃岐典侍は果然とし、周防内侍の歌を思い浮かべる。

おはしまししをりより、かくは聞こえしかど、いかにも御いらへのなかりしには、さらでもとおぼしめすにや、それを、いつしかといひ顔に参らんこと、あさましき。周防の内侍、後冷泉院におくれまゐらせて、後三条院より、七月七日参るべきよし、おほせられたりけるに、

天の川おなじ流れと聞きながらわたらんことはなほぞかなしき

とよみけんこそ、げにとおぼゆれ。 (嘉承二年十月 四二八〜四二九頁)

周防内侍は後冷泉・後三条・白河・堀河・鳥羽の五代の天皇に仕えた女房である。後冷泉天皇の崩御後、後三条天皇への再出仕を求められた周防内侍が詠んだ「天の川」歌は、讃岐典侍の置かれた状況や心境と一致するものとして引用されている。

「天の川」歌は、『後拾遺集』に入集する歌であるが、『讃岐典侍日記』にはこのように勅撰集や『栄花物語』に入集する古歌を一首そのまま引用する場面が六例ある。日記文学において、古歌を一首そのまま引用する例は珍しく、<sup>(4)</sup>『讃岐典侍日記』の和歌の特徴の一つと言える。古歌の引用をめぐっては、歌合等に名が残らない讃岐典侍の歌才の問題とされる一方で、<sup>(5)</sup>「すでに人口に膾炙されている歌をもって、自己の思いをそれに託し表わすもの」であり、「この作者の積極的に取り用いた自己表出の一つの方法であったとみられる」<sup>(6)</sup>ともされてきた。

古歌に讃岐典侍の思いが託されているのは、直後に「げにとおぼゆれ」とあることから明らかだろう。本稿で注目したいのは、「天の川」歌が

天皇の崩御を悼む哀傷歌であるという点である。特に後冷泉天皇は、在位のまま崩御したという点で堀河天皇と共通し、先例となる天皇であった。『讃岐典侍日記』において初めて配置された和歌でもある「天の川」歌は、讃岐典侍の心境との一致に加え、天皇追慕の哀傷歌であったからこそ特に引用されたと考えられるのではないか。この点に注意して、以下、下巻における古歌の引用の様相を確認してゆく。

次に古歌の引用が見られるのは、翌年の三月の記事である。月忌みのため、堀河院に参上した讃岐典侍は花を見て、秦兼方の歌を思い浮かべる。続けて、すっかり変わってしまった堀河院の様子を目の当たりにして、上東門院の歌を挙げる。

三月になりぬれば、例の、月に参りたれば、堀河院の花、いとおもしろし。

兼方、後三条院におくれまゐらせて、

いにしへに色も変はず咲きにけり花こそものは思はざりけれ

とよみけん、げにとおぼえて、花はまことに色も変はらぬけしきなり。

昔の清涼殿をば御堂になさせたまひて、七月までは、宵暁の例時たえず、二十人の蔵人町、左近の陣など、僧坊になりたり。内裏にてありしところども、さびしげなる、見るにも、うせさせたまへりけん院のうちの、ひきかへかいすみさびしげなるを、御覧じて、

影だにもとまらざりける雲のうへを玉のうてなとたれかいひけん

とよませたまひけん、げにとぞおぼゆる。

(嘉承三年三月十九日 四四五〜四四六頁)

「いにしへに」歌は『金葉集』<sup>(7)</sup>に入集する後三条天皇を追慕する歌、「影だにも」歌は『栄花物語』に見られる一条天皇を追慕する歌である。この

二首は、堀河院を訪問した讃岐典侍の心境と一致する歌として引用されているが、ここでも特に天皇追慕の哀傷歌が選ばれていると言えるだろう。

天皇追慕の哀傷歌は、諒闇が明け、衣服を改める場面にも見られる。

一天の人、御ころざしあるもなきも、みなしたりつるに、親しくつかうまつりつるさへ一度に脱ぎてんずる、思ふによりならぬことなれど、脱ぎかへまうき心地する。かぎりあることなれば、いかかとして脱ぎつ。遍昭僧正の、深草の帝におくれまゐらせて、法師になりてこそうせけるが、またの年、御服人々脱ぎけるに、

みな人は花の袂になりぬなり苔の衣よかわきだにせよ

とよみけん。

(嘉承三年七月二十五日 四五三―四五四頁)

堀河天皇の形見と想っていた喪服を着替えたくないと思うものの、「かぎりあることなれば」脱ぎ替えた讃岐典侍の心境に合うものとして、『古今集』に入集する「みな人は」歌が引用されている。

ここまで、古歌を引用する場面に順に確認してきた。自身が置かれた状況や心境に一致する歌を引用し、「げに」と思いを深めるといった形が繰り返されているが、そのすべてが天皇の崩御を悼む哀傷歌であることに注意される。これらの古歌は、讃岐典侍の思いを表すと同時に、天皇追慕の先例となるものという意識から特に選択されたと考えられるのではないだろうか。

『讃岐典侍日記』が先例となる作品を意識する日記であったことは、次の鳥羽天皇即位の記事の一節からも知られる。

人ども、見さわぎ、いみじく心ことに思ひあひたるけしきどもにて、見さわ

げども、ただわれは、何ごとにも目も立たずのみおぼえて、南のかたを見れば、例の、八咫鳥、見も知らぬものども、大頭など立てわたしたる見るも、夢の心地ぞする。かやうのことは、世継など見るにも、そのこと書かれたるところは、いかにぞやおぼえてひきこそかへされしか、うつつにけざげざと見る心地、ただおしはかるべし。

(嘉承二年十一月一日 四三七頁)

鳥羽天皇の即位に際し、讃岐典侍は襄帳の役を務めるが、その日の殿舎や人々の様子を詳述する中で、傍線部のように「世継」すなわち『栄花物語』に言及する。即位の記事を記すにあたり、先例となる『栄花物語』が強く意識されていたことが分かる。古歌の引用もまた、天皇追慕の先例としての意識からであり、堀河天皇を歴代の天皇と並び追慕される存在として位置づけようとしていると捉えることもできるだろう。

また、古歌が見られるのは、次の天皇への出仕が要請される、月忌みに参上する、諒闇が明けるといった公的な側面が強い場面でもある。『讃岐典侍日記』には讃岐典侍と堀河天皇の親密な関係が描かれており、その関係性の中で追慕してゆく姿が際立つが、こうした公的な側面が強い場面においては歴代天皇を追慕する哀傷歌を特に引用する。ここに、堀河天皇に仕えた典侍という視点から天皇追慕を語ろうとする姿勢を認めることもできる。

もっとも、天皇追慕の哀傷歌以外の古歌が引用される場面もある。次の天仁元年(一一〇八)八月の記事は、内裏遷幸の翌朝の様子を描いたものである。鳥羽天皇に請われて内裏を案内する中、堀河天皇が植えた前栽が生い茂る様子を見た讃岐典侍は、御春有輔の歌を思い出す。

参りて見るに、清涼殿、仁寿殿、いにしへに変はらず。台盤所、昆明池の御

障子、今見れば見し人にあひたる心地す。弘徽殿に皇后宮おはしまししを、殿の御宿直所になりたり。黒戸の小半菰の前に植ゑおかせたまひし前栽、心のままにゆくゆくとおひて、御春有輔が、

君が植ゑしひとむら薄虫の音のしげき野べともなりにけるかな

といひけんも、思ひ出でらる。

(天仁元年八月二十二日 四五九頁)

「君が植ゑし」歌は、『古今集』の詞書から知られるように、藤原利基に對する哀傷歌である。

また、古歌を引用する最後の場面は次のとおりである。

晦日の夜、内へ参るとて堀河院過ぐるに、二条の大路、堀川などかいすみ、ものさわがしげに人の出で入りたるけしき見えず。目のみまづとどまりて、主なしとこたふる人もなければ宿のけしきぞいふにまされる

とよみけん古言さへ思ひ出でらる。

(天仁元年十二月三十日 四七五頁)

年の暮れに堀河院を通り過ぎた讚岐典侍は、その物寂しげな様子に能因法師の「主なしと」歌を思い出す。『後拾遺集』に入るこの歌も哀傷歌ではあるが、天皇に對するものではない。

このように哀傷歌であっても天皇に對するものではない歌を引用する場面が二例あるが、注目すべきは諒闇が明け、鳥羽天皇が内裏に遷御した記事以降にのみ見られるという点だろう。<sup>(10)</sup>つまり、堀河天皇の喪に服す期間の記事においては、特に天皇追慕の先例となる哀傷歌が選ばれ、引用されていると捉えることができるのである。そこには、堀河天皇を歴代天皇に並ぶ存在として追慕しようとする、典侍としての視点があったと思われる。次の和歌も、典侍という視点からの記録として読み解くことができる例

だろう。

またの日、「出雲といふ女房のよみて、北面の壺の薄に結びつく、

今はとて別るる秋の夕暮は尾花がすゑもつゆけかりけり

とよみたりつれ」と聞くも、あはれなり。(嘉承三年七月二十日 四五二頁)

堀河天皇の一周忌の翌日、天皇の素服を賜った女房の一人である出雲の歌である。一周忌が過ぎ、堀河院にとどまっていた女房たちも退出することとなった。その寂しさを詠んだもので、本節で確認してきたいわゆる古歌ではないが、讚岐典侍が耳にした歌として記されている。この歌は讚岐典侍との贈答に発展しないにもかかわらず、記された唯一の他者詠である。讚岐典侍自身の詠歌ではなく、堀河天皇を追慕する他者の詠歌を載せることで、人々から追慕される存在としての堀河天皇を記録しようとしたと解することができよう。こうした堀河天皇の姿を記しとどめようとする下巻には、典侍という立場からの「追慕の記」という側面がある。

ところで、諒闇の前後で古歌の引用に明確な変化が現れている点についてはどのように考えるべきだろうか。この変化にこそ、下巻における追慕のあり方が垣間見えるのではないだろうか。次節では、和歌を離れ、堀河天皇にまつわる回想記事に着目して、この点を検討する。

### 三、回想記事の変容

『讚岐典侍日記』には、繰り返し回想される出来事がある。関白藤原忠実が病床の堀河天皇のもとに参上したところ、天皇が膝を高く立て、添い臥しする讚岐典侍を隠そうとしたという話である。

大殿近く参らせたまへば、御膝高くなして陰に隠させたまへば、われも単衣

を引き被きて臥して聞けば、「御占には、とぞ申したる。かくぞ申したる。御祈りは、それそれなん始まりぬる。また、十九日より、よき日なれば、御仏御修法のべさせたまふ」と申させたまへば、「それまでの御命やはあらざる」とおほせらる。かなしき、せきかねておぼゆ。

(嘉承二年七月十一日 四〇一〜四〇二頁)

上巻の記事の一節である。忠実が堀河天皇に告げた言葉の中には讓位にまつわる「御占」の話も含まれており、興味深いのが、讃岐典侍にとって印象深かったのは膝を立てて隠そうとしてくれた堀河天皇の心遣いであった。この膝の陰の思い出が下巻に二度、記されている。<sup>(11)</sup>

まずは鳥羽天皇への出仕が本格的に始まった嘉承三年正月である。讃岐典侍が天皇に食事を差し上げているところに参内した忠実は、次のように声をかける。

「思ひかけざりしことかな。かやうに近やかに参りて、ものなど申ししこととは、思はざりしかな。例ならでおはしましをりなど、御かたはらに添ひ臥させたまへりしをりに参りたりしかば、御膝高くなさせたまひて、陰に隠させたまひしをり、かやうならんことどもこそ思はざりしか。げに陰にも隠れさせたまひしかな。世はかくもありけるかな」といひかけて立たせたまひぬる聞くぞ、げにと心憂き。

(嘉承三年正月三日 四四三頁)

讃岐典侍と忠実が共有する思い出として堀河天皇の心遣いを語った忠実は、すっかり変わってしまった今の様子に「世はかくもありけるかな」と感慨を漏らす。ここでは、忠実という第三者を通して堀河天皇にまつわる出来事が回想されているという点に注目しておきたい。

次にこの出来事が回想されるのは、諒闇が明けた後、鳥羽天皇の内裏遷幸の夜である。天皇に添い臥しながら、かつての日々を思い出してゆく。

殿のあとのかたに寄りたてまつらせたまひしかば、そのままにてさぶらはんは、なめげに見苦しくおぼえしかば、起き上がりて退かんとせしを、見えまゐらせじと思ふなめりとおぼして、「ただあれ。几帳作り出でん」とて、御膝を高くなして、陰に隠させたまへりし御心のありがたき、今の心地す。

(天仁元年八月二十一日 四五七〜四五八頁)

退出しようとした讃岐典侍を思いやり、膝を立てて隠してくれた堀河天皇の言動を回想する。先の場面と比べ、忠実の姿は目立たない。讃岐典侍自身によって回想されることにより、堀河天皇との親密な様子がより伝わるものとなっている。

以上、堀河天皇の膝の陰にまつわる回想記事を見てきたが、下巻の二つの記事には明らかな差異がある。諒闇の最中の記事では忠実という第三者による回想として記す一方で、諒闇が明けた後の記事では讃岐典侍自身による回想として記している点である。いずれも讃岐典侍と堀河天皇の親密さを物語る記事であるが、その記し方の差異には注意すべきだろう。前者は忠実という第三者を介入させることで、讃岐典侍一人の思い出ではなく、堀河天皇に仕えた人々によって共有される出来事として描いているのである。

そもそも、諒闇の最中の堀河天皇に関する回想は、公的な行事にまつわるものが多い。例えば、灌仏の日の鳥羽天皇の姿を目にして「引直衣にて、念誦してこそ御帳の前におはしまししか」(四四八頁)と、かつての堀河天皇の姿を回想する。あるいは、堀河天皇在世中の最勝講の話を目にして

「その日の論議をいひ出だし、いみじさなどさたせさせたまひし」(四四九頁)と、講が終わった後の堀河天皇の様子を回想するといった具合である。六月の記事は公的な行事にまつわる回想ではないが、堀河天皇に仕えた女房たちが複数登場する。堀川の泉見物に出かけた夜、「常陸殿といふ女房」に呼ばれ、讃岐典侍たちは参内した。その翌朝、堀河天皇が用意していた扇引きをすることになる。

つとめて、明くるやおそきとはじめさせたまひて、人たち召しすゑて、大式の三位殿をはじめてゐあはれたりしに、「まづ、引け」とおほせられしかば引きしに、うつくしと見しをえ引きあてで、なかにわるかりしを引きあてたりしを、うへに投げおきしかば、「かかるやうやある」とて、笑はせたまひたりしことを、但馬殿といふ人の、「家の子の心なるや。こと人はえせじ」など興じあはれしに、そのをりは何とおぼえざりしことさへ、いかでさはしまゐらせけるにかとなめげに、今日は、ありがたくおぼゆる。

(嘉承三年六月 四五〇〜四五二頁)

堀河天皇の乳母である大式の三位をはじめ、多くの人がいる中、讃岐典侍は見劣りがする扇を引き当て、御前に投げ出した。それを堀河天皇は笑い、但馬殿は「家の子」のようだと評したのであった。

この回想記事からは讃岐典侍と堀河天皇の格別の親しさが伝わってくるが、複数の女房が具体的に登場している点は看過できない。主君として「ありがた」い堀河天皇のもとでも仕えた女房たちとの思い出として、この記事は記されていると捉えられるのである。やはりここでも、讃岐典侍一人の思い出ではなく、堀河天皇の御代に仕えた人々によって共有される思い出として描かれていると言えるだろう。

諒闇が明けた後の回想記事は、先の膝の陰にまつわる思い出のように、全体的に変化する。一例として、五節の営みを鳥羽天皇と見るうちに堀河天皇と二人で過ごした雪の朝を回想するという場面を見てみる。

わが寝くたれの姿、まばゆくおぼえしかば、「常よりみめほしきつとめてかな」と申したりし、をかしげにおぼしめして、「いつもさぞ見ゆる」とおほせられて、ほほゑませたまひたりし御口つき、向かひまゐらせたる心地するに、「中略」滝口の本所の雑仕なめり、女の声にて、透垣のもと近くさし出でて見るけはひして、「あな、ゆゆしの雪の高さや。いかがせんずる。裾もえ取り行くまじきはとよ」といひしを聞かせたまひて、「これ、聞け。いみじき大事出で来にたりとこそ思ひあつかひたれ。雪のめでたき、御目さめぬる心地する」とて、笑はせたまひしなど、思ひ出でられて……

(天仁元年十一月 四六五〜四六六頁)

起き出した姿のまま、ともに雪を眺め、甘美な時間を過ごす。それを破る雑仕女の声も記されているが、この場面は明らかに讃岐典侍と堀河天皇の二人だけに共有される思い出として描かれている。

この場面に続けて、皇后宮方での打出の衣を目にした讃岐典侍は、再び一昨年のことを思い出してゆく。堀河天皇は自ら人々に指示を出し、讃岐典侍には一の間で袖口を出させたのであった。

「一の間には出だせ」とおほせられしかば、みな人の袖口も童胆なるに、わが唐衣の赤色にてさへありしかば、一人まじりたらんがけしきおぼえて、「これこそ見苦しくや」と申ししかば、「遠くては何か見えん。あへなん。その人といふ、書きつけてもなし。よも見えじ」、あながちにせんとおぼしめ

したりしことなれば、とがなきやうにいひなさせたまひて、すべて黒戸のたはらにつづきたる、小半部より御覧じて、「あの袖、いますこしさし出だせ。これ、すこし引き入れよ」など、もて興ぜさせたまひし有様、いかでか思ひ出でざるべきぞなどおぼえて、目とどめらるれ。

(天仁元年十一月 四六七頁)

讃岐典侍は自身の唐衣の色が見苦しいのではないかと恥じらうが、堀河天皇は讃岐典侍の科ではないと言いなす。ここでは、堀河天皇に仕える女房たちが登場しているはずだが、その具体的な名は一切記されない。そのため、讃岐典侍をかばう堀河天皇の姿がとりわけ印象づけられる形となっている。先の扇引きの思ひ出とは異なる回想のあり方である。

このように、諒闇の前後で回想記事は変化する。諒闇の最中は堀河天皇に仕えた人々とともに堀河天皇の姿を描く一方、諒闇が明けた後は二人の親密な関係を殊更に描いてゆく。前節で検討した古歌の引用と同様、堀河天皇を公に追悼する期間は、典侍としての視点で堀河天皇の御代を回想し、記そうとしていたと捉えられるだろう。

下巻は「追慕の記」と称されるが、古歌の引用、回想記事の変容から、諒闇を境にその追慕のあり方は変化していると言える。讃岐典侍と堀河天皇の関係性を語る時、雪の朝の思ひ出に象徴される親密さを無視することはできないが、諒闇の最中の記事においては私的な内容は控えられていたと考えられる。代わりに記されたのが、天皇追慕の先例となる哀傷歌や、ともに仕えた人々と共有される堀河天皇の思ひ出であった。このように諒闇を意識し、記述姿勢を変化させる下巻は、典侍という立場が強く反映した「追慕の記」であったと言えるだろう。

#### 四、讃岐典侍の詠歌の特徴

ここまで、古歌をはじめとして他者の詠歌を中心に取り上げてきたが、讃岐典侍自身はどのような歌を詠んでいるのだろうか。一節で挙げた「五月雨の軒のあやめもつくづくと袂に音のみかかる空かな」は讃岐典侍の自詠であるが、以下に挙げる『後拾遺集』に入集する和泉式部の詠歌との関係が諸注釈により指摘されている。

五月五日にひとのつつかはしける

和泉式部

ひたすらにのきのあやめのつくづくとおもへばねのみかかるそでかな

(七九九)

傍線部が讃岐典侍の詠歌と一致する部分であるが、和泉式部の歌に大きく拠っていることが分かる。和泉式部もまた、高貴な男性と恋に落ち、先立たれた女性であった。そうした共通点から特に影響を受けたのだろうか。あるいは、当時最新の勅撰集であった『後拾遺集』の最多入集歌人という観点から、和泉式部に関心を寄せていたのだろうか。

讃岐典侍の自詠の中には、このように先行歌に大きく拠ったものがある。歌才とも関わる問題であるが、讃岐典侍の詠歌の特徴とも言えるだろう。以下では、先行歌に拠った歌を見てみる。

幼い鳥羽天皇への再出仕を要請された讃岐典侍は、堀河天皇に仕えたときのようにはいかないだろうと涙し、その思いを歌にする。

「……いまさらに立ち出でて、見し世のやうにあらんこともかたし。君はいはけなくおはします。さてならひにしものぞとおぼしめすこともあらじ。さ

らんままには、昔のみ恋しくて、うち見ん人はよしとやはあらん」など思ひつづくるに、袖のひまなくぬるれば、

乾くまもなき墨染めの袂かなあはれ昔のかたみと思ふに

(嘉承二年十月 四三〇～四三一頁)

「乾くまも」歌は、藤原顕綱の家集『讚岐入道集』に入る次の歌の改作とされる。顕綱は讚岐典侍の父である。

故院のうせさせたまひたりけるに

かわくまもなきすみぞめのたもとかなくちなばなにをかたみにもせん(八一)

讚岐典侍の詠歌は、故院すなわち後三条天皇を追慕する顕綱の歌の下の句を改作したものである。

鳥羽天皇に出仕しながらも堀河天皇を追慕し続けた一年が終わりを迎えるとき、下巻も閉じられる。その結びとなる部分には、『拾遺集』に入る紀貫之の「こふるまに年のくれなばなき人の別やいとどとほくなりなん」<sup>(12)</sup>

(二三〇九)の初句のみを改変した歌が置かれる。

われは、ただ、ひと所の御心のありがたくなつかしう、女房主などこそかくはおはしまさめとおぼえたまひしが、忘らるる世なくおぼゆるままに、書きつけられて。

嘆きつつ年の暮れなばなき人の別れやいとど遠くなりなん

(天仁元年十二月三十日 四七六頁)

初句のみの改変をどのように捉えるかについては、「恋ふるまに」では先帝に対する思いが露骨すぎるために、「なげきつつ」と改めることによ

って自身の心境を託し得たものと感じ、自作歌のごとくに用いたものであろう」という指摘が首肯されるだろう。<sup>(13)</sup>

下巻の結びに続けて、追記という形で年次不明の十月の記事がある。堀河天皇の遺骨が安置されていた香隆寺を参拝した讚岐典侍は、人を招くような尾花の様子を目にして、「花薄まねくにとまる人ぞなき煙となりし跡ばかりして」(四七七頁)を詠む。

この歌については、次に挙げる『弁乳母集』に見える歌との関連性を指摘することができるだろう。弁乳母は顕綱の母、すなわち讚岐典侍の祖母である。

まつのをの行幸、春宮の女房見けるに、さが野のささの

うへにたてて、はなどもをさして、その野を、ひとくる

まつづきたり、すすきの車に、源少将すけつな

うちまねく気色ことなるはなすすきゆきすぎがたき心地こそすれ(三四)

かへし

行きすぎぬ気色ともみずはなすすきまねくにとまる人しなれば(三五)

「乾くまも」歌や「嘆きつつ」歌の場合とは異なり、詠歌状況に共通点はない。あくまで表現面での類似であるが、父顕綱の家集を参照していることなどを考慮すると、祖母弁乳母の家集を目にし、その表現を参考にしていた可能性は十分に考えられる。

以上、讚岐典侍の自詠のうち、先行歌に大きく拠ったと思われるものを取り上げてきた。勅撰集や、父や祖母といった身内の家集に学び、表現を摂取していたと考えられる。もっとも、その摂取の仕方は未熟なものであったと言わざるを得ない。



そもそも、讃岐典侍は歌才には恵まれていなかったと思われる。それは、二節で取り上げた古歌を一首そのまま引用してしまう態度や、以下に挙げる先行歌に拠らない讃岐典侍の独詠からも明らかである。

夜の御殿の壁に、明け暮れ目なれておぼえんとおぼしたりし薬を書きて、押しつけさせたまへりし笛の譜の、押されたる跡の、壁にあるを見つけたるぞ、あはれなる。

笛の音の押されし壁の跡見れば過ぎにしことは夢とおぼゆる

(天仁元年九月 四六一頁)

かつて堀河天皇が貼り付けた笛の譜の跡を壁に見つけた折の詠歌である。上の句は、地の文の内容(傍線部)そのままであり、極めて散文的な一首と言えるだろう。

このように古歌の引用や先行歌の改作が目につく『讃岐典侍日記』の和歌は、独創性には欠けるものであるかもしれない。だが、讃岐典侍のように歌合等に出詠することもなかった多くの女房たちが何を参考にし、どのようにして歌を詠もうとしていたのかを知る手がかりの一つとなるだろう。<sup>(14)</sup>歌壇では活躍することのなかった女房の和歌活動の一端を、『讃岐典侍日記』は垣間見せてくれるのである。

## 五、おわりに

以上、『讃岐典侍日記』下巻の特徴である和歌に注目し、中でも古歌の引用や、先行歌に大きく拠った讃岐典侍の詠歌について論じてきた。古歌の引用の様相と回想記事の変容から、讃岐典侍は諒闇を意識し、その前後で記述姿勢を変化させていたと考えられる。特に諒闇の期間においては天

皇追慕の先例となる哀傷歌を引用し、ともに仕えた人々と共有される堀河天皇の姿を回想している。このことから、下巻には典侍としての視点で天皇の御代を振り返り、追慕しようとする一面もあったと捉えることができるだろう。

主君の死を描き、追悼する女房日記はいくつかあるが、『讃岐典侍日記』はその早い例となる作品である。日記という形式での追悼を試みたとき、天皇追慕の先例として讃岐典侍の目に留まったのは哀傷歌ではなかったか。過剰とも言える古歌の引用は、堀河天皇を歴代天皇に並び追慕される存在として描くものであると同時に、自らの日記を哀傷歌に代表される天皇追慕の文学の中に位置づけようとするものであったと思われる。

なお、本稿では古歌の引用等、特徴的な和歌に注目したため、取り上げなかったものもある。讃岐典侍の贈答歌の位置づけなど、深めるべき問題は多い。今後の課題としたい。

### 注

(1) 二十三首の内訳は以下の通りである。

讃岐典侍の自詠…十一首

他者詠…六首

勅撰集、『栄花物語』等に入集する古歌…六首

なお、天仁元年十二月の記事に見られる「嘆きつつ年の暮れなばなき人の別れやいとど遠くなりなん」(四七六頁)は、紀貫之の「こふるまに年のくれなばなき人の別れやいとどとほくなりなん」(『拾遺集』哀傷・一三〇九)の初句のみを改変したものであるが、讃岐典侍の自詠として数えた。この歌を含めた讃岐典侍の詠歌の特徴については、四節で詳述する。

(2) 『讃岐典侍日記』の引用は、新編日本古典文学全集に拠り、引用本文の下に頁数を記す。

(3) 石井文夫校注、新編日本古典文学全集『讃岐典侍日記』解説(小学館、一

九九四年)。

- (4) 『和泉式部日記』に、『古今集』の歌を一首そのまま手紙に認めてきた帥宮に対し、女が『伊勢物語』の歌を返すという場面がある。

昼つかた御文あり。見れば、

あな恋し今も見てしが山がつの垣ほに咲けるやまとなでしこ

「あな物狂ほし」と言はれて、

恋しくは来ても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに

と聞こえたれば、うち笑ませたまひて御覽ず。

(新編日本古典文学全集 七九頁)

これは古歌を用いた和泉式部と帥宮の当意即妙のやり取りであり、『讃岐典侍日記』の例とは性格が異なることは明らかである。

- (5) 守屋省吾『讃岐典侍日記』の作者 藤原長子(『女流日記文学講座』第四巻、勉誠社、一九九〇年)。

- (6) 宮崎莊平「讃岐典侍日記の形質 作中和歌の位相」(『平安女流日記文学の研究』笠間書院、一九七二年、初出は一九六四年)。

- (7) 『金葉集』(二度本・雑上・五二四)には次のようにある。

後三条院かくれおはしまして又のとしのはる、

さかりなる花をみてよめる

左近府生秦兼方

こそ見しに色もかはらずさきにけりはなこそ物はおもはざりけれ

『讃岐典侍日記』とは初句が異なるが、日記本文中に「兼方、後三条院におくれまるらせて」とあり、引用であることが明示されていることから、古歌の引用の例として数えた。なお、『讃岐典侍日記』成立時点において、『金葉集』は編纂されていなかったと考えられる。兼方の歌は、いずれも『讃岐典侍日記』成立以降の作品であるが、『袋草紙』や『宝物集』、『宇治拾遺物語』などにも見られる有名な歌であり、讃岐典侍も何らかの資料を通して接していたものと思われる。

- (8) 『古今集』の詞書には「藤原のとしもとの朝臣の右近中将にてすみ侍りけるぎうしの身まかりてのち人もすまずなりにけるを、秋の夜ふけてものより

まうでけるついでに見いれければ、もとありしせんざいもいとしげくあれたりけるを見て、はやくそこに侍りければむかしを思ひやりてよみける」(哀傷・八五三)とある。

- (9) 『後拾遺集』の詞書には「靈山にこもりたるひとにあはむとてまかりたりけるにみまかりてのち十三日にあたりてもいみずとききはべりて」(哀傷・五五三)とある。

- (10) 拙稿「天皇の代替わりと『讃岐典侍日記』—鳥羽天皇から見る下巻の位置づけ—」(『皇統迭立と文学形成』和泉書院、二〇〇九年)において、諒闇明けの記事を境として、鳥羽天皇に対する描写が幼さを強調するものから主君として振る舞う様子を捉えたものへと変化することを指摘した。

- (11) 天仁二年八月の記事では「一昨年ころに、かやうにて夜昼御かたはらにさぶらひしに」(四五七頁)とあり、嘉承元年(一一〇六)の出来事として記される。同様の出来事が複数回あったのか、一度きりの出来事を印象的なものとして繰り返し回想しているのかは解釈が分かれるところであるが、讃岐典侍・堀河天皇・忠実の三人が登場し、讃岐典侍が天皇の膝の陰に隠されるという共通した内容をもつ点で、比較対象となる記事である。

- (12) 紀貫之の「こふるまに」歌は『後撰集』哀傷にも入集する。

- (13) 宮崎莊平前掲注(6)論文。

- (14) 田淵句美子氏は、『土御門院女房』の和歌に「一首全体が剽窃と言えるほど古歌に酷似」するものがあり、「和歌一首の表現構成が、散文のような作りで、一文のような構成が多い」ことを指摘され、「和歌が一文の文章のような構成になることは、『建礼門院右京大夫集』の和歌などにも見られ、歌壇での修練をしていない歌人に多い特質かとも思われる」とされる(田淵句美子・中世和歌の会『民部卿典侍集 土御門院女房全釈』解説(風間書房、二〇一六年))。散文に重点を置く『讃岐典侍日記』の和歌と、和歌を中心に据える『土御門院女房』や『建礼門院右京大夫集』を単純に並べて扱うことはできないが、これらの作品がすべて故人の追慕を主題としている点では注意される。

(たんげ あつこ) 日本語日本文学科